

イ セ ツ エ 頭 巻



photo: Sayo Nagase

## 不完全な大人のままで

小説家

村田 沙耶香

### PROFILE

むらた さやか  
1979年、千葉県生まれ。玉川大学卒業。  
2003年「授乳」で群像新人文芸賞優秀作、  
2009年『ギンイロノウタ』で野間文芸新人  
賞、2013年『しろいろの街の、その骨の体  
温の』で三島由紀夫賞、2016年「コンビニ  
人間」で芥川賞を受賞。その他の著書に『殺  
人出産』（講談社文庫 2016）、『タダイマト  
ピラ』（新潮文庫 2016）、『ハコブネ』（集英  
社文庫 2016）など。

思春期のころ、私は「完璧な大人」を探していた。それは性愛への目覚めが早かったことに起因しているのかもしれない。まだ記憶もおぼろげな、幼稚園に入る数年前のころから、私は自分が「女」であることをとても意識していた。幼少期から、父が「男」で自分が「女」であることを意識して、うまく甘えることができなかった。なので、小学三年生のころ、岡田先生（仮名）が担任になったときは驚いた。岡田先生は「男」だけれど、それ以上に「先生」だった。私を抱き上げ、頭を撫で、けれどそうされている私は「女」ではないのだった。

私は初めて、性別のないスキンシップというものを知った。恐らく、先生方から見れば異常だと思えるくらい、私は岡田先生に懐いた。肩車をせがみ、後ろから抱きついて脅かし、膝の上に乗ってじゃれついた。

五年生になって先生が担任でなくなると、友達が口々に言った。「さやかちゃんは、岡田先生のこと好きなんだもんね」。違う、と叫びたかったけれど、うまく説明できなかつた。皆は恋の噂に興味を持ち始めた年頃で、私が先生に懐く様子が、恋をしている少女のよ

うに映るらしいということは、私にも理解できた。もう担任ではなくなった岡田先生のところへ遊びに行くと、「もうクラスが変わったんだから、あんまり来るなよ」と先生は笑いながら注意した。新しい女の担任の先生には、「村田さんは岡田先生がいいのよね」と溜息混じりに言われた。それを見て、私もようやく、自分が岡田先生を「卒業」しなければいけないのだと知った。

私はそのときからずっと、岡田先生の代わりになる人を探していたのかもしれない。中学になったとき、私は塾の先生と仲良くなった。先生はふざけて私の頭を叩いたり、笑って肩を叩いたりした。私はその、子供にするようなスキンシップがうれしかった。

先生がふざけて、耳元で「結婚しよう、村田」と言ったとき、私はうまく笑うことができなかった。それは単なる冗談だったのだと思う。でも、「女」だから言われる冗談だった。私はただの「子供」でいたかったが、こんな人のいい先生を相手にしても、それはもう無理になってしまったのだと悟った。

私は先生を避けるようになった。先生はそんな私をますますから

かった。「恥ずかしがるのがかわいいよ」「ここに電話してきなさい、特別に教えてあげるから」「お嫁さんにおいでよ」それは密室で行われたことではなかったし、周りの皆は笑っていたので、先生にとっては本当に冗談でしかなかったのだと思う。でも、「女」でなければ言わないはずの冗談の数々は、私にとっては苦しいものだった。ちょうどそのころ、私は学校で、一番仲がいい子と口をきいてもらえなくなってしまう。私は自分の苦しみを、「完璧な大人」に打ち明けたかった。けれど、「完璧な大人」はどこにもいなかった。大人になった今だからわかるが、そんな人はきつとこの世のどこにもいないのだと思う。けれど、子供だった私はそれを求めてしまった。探してしまった。

思春期特有の思い詰めた言葉だと思って欲しいが、私は、そのとき、「死にたかった」。そして、根底ではとても「生きたかった」。死にたい気持ちを誰かに打ち明けて処理し、何としても生き延びたかった。けれど、本当に申し訳ないことだが、そのときの私には、「信用できる完璧な大人」はどこにもいなかった。「迷惑な正義感で大騒ぎして、事態を悪化させそうな大人」や、「よくある思春期のたわごととして、上っ面のことを言っつきそうな大人」はいたが、「ただ、話を聞いてくれる人」を、私は見つけることができなかった。

いのちの電話に電話をしたが、なかなか繋がらず、やっと電話が通じて、上手く自分の状況を説明することができなかった。たとえば殴られたりいじめにあったり、もっと自分より深刻な状況に陥っている子がたくさんいるだろうと思うと、言葉が詰まった。そのまま、「ごめんなさい、大丈夫になりました。ありがとうございます」と言っただけで電話を切った。

突拍子もないようだが、私はテレクラにも電話をした。当たり前なことかもしれないが、テレクラの男性はやけに優しくかった。だが突然変態的なことを言われ、驚いて切った。

私は幸運にも、そういう大人から性的に何かをされるということもなく、無事に「生きたい」ほうの自分を守り、思春期を乗り切ることができた。けれど、そうできない自分のような子供が今でもたくさんいるのではないかと、ずっと考えている。そして、あのときの自分が求めた「完璧な大人」に、今の自分もなれていないなあと思っっている。

不完全な大人のまま、私は小説を書いている。それは子供を救うようなものでは到底ない、過激なものばかりだ。でも、小説は私の救いだった。なぜ思春期を乗り越えることができたかといえば、「不完全な大人」らしき人が書いた、自分より絶望した人間の言葉が、本の中にあっただけだった。誰かが書き残した絶望が、私にとっては希望だった。その暗闇を頼りに、思春期を少しずつ進んで、乗り越えていった。

「高校生や高校の国語の先生が興味・関心を持つような内容であれば、特にテーマは何でも構いません。」こんな依頼を頂いて、自分の思春期について自由に書いた。とはいえ、自由過ぎたような気がして、少し反省している。けれど、この機会に自分の絶望を少しだけ書きとめたくて、ページを使わせてもらった。

本と出会い、無事に高校に進学して私はすくすく大人になり、そのことにも感謝している。なので、これを読んだ先生が卒倒しないように祈る。私は自分の絶望に、とても感謝している。思春期に絶望したことが、自分という人間を豊かにしたと思っっているからだ。そして不完全な私は、今日も小説を書くためにパソコンを開いている。